

これまで様々な科学的根拠に基づく理学療法領域での報告がなされてきたが、小児領域については必ずしも十分とはいえないのが現状である。さらに小児領域の臨床実習を十分には経験できない状況にあって、もし一般病院などで小児理学療法を施行するとき十分なサービスを提供しえるだろうか。このような危機的状況にあるという認識のもと、最新の脳性麻痺の評価と治療について根拠に基づき論じ、平易にかつ実践的に提示することが望まれる。そこで今回最近の脳性麻痺にかかわる理学療法の現状と進歩について多角的に概説していただくこととした。

■脳性麻痺の理学療法（藪中良彦論文）

脳性麻痺の理学療法の歴史的流れを振り返り、現在私たちが子どもたちに提供している理学療法が、どのように形付けられまた批判されているのかを紹介する。そして、子どもとご家族中心の理学療法・生活障害・能動的学習・子どもに関わる理学療法士のネットワーク作りをキーワードに、今後の脳性麻痺の理学療法の向かうべき方向を、臨床家としての私見を交えて紹介する。

■脳性麻痺児の摂食・嚥下機能障害へのアプローチ（平井孝明論文）

脳性麻痺児の摂食・嚥下機能障害では誤嚥の危険性が高く、観察や介助操作下での評価と共に、形態変化・嚥下動態・誤嚥状況の把握に、嚥下造影検査による客観的な画像診断が有用である。摂食・嚥下機能障害に対する治療は、異常姿勢筋緊張を基にした呼吸機能障害、感覚過敏、全身の運動障害との関連性の解釈が重要であり、同時にアプローチする必要がある。

■脳性麻痺児の動作解析と理学療法（米津 亮、他論文）

脳性麻痺児に対する動作解析を実施した知見から得られた経験を紹介することを本稿の目的とする。脳性麻痺児に対する理学療法アプローチにより変化する動作パターンを定量的評価と結びつけ、その解説を行った。さらに、利用者中心の理学療法と動作解析の接点について検討し、その方向性を模索したい。

■脳性麻痺児の歩行—痙直型両麻痺児について（島 恵、他論文）

痙直型両麻痺児の歩行異常の特徴と病態について概説する。子宮内環境の経験不足に加えて、錐体路や視床皮質路、視放線の障害が重なって、歩行異常を形成している。歩行改善には下肢への治療に加えて、乳児期から体性感覚や視知覚への総合的なアプローチが必要である。また、近赤外線分光法を用いた光イメージングによる歩行時の大脳皮質活動の計測の結果から一次感覚運動野の賦活が治療介入により変化する可能性が示唆された。

■脳性麻痺のスポーツ—科学的トレーニングの可能性について（石塚和重論文）

脳性麻痺のスポーツの特性とアプローチ、スポーツの目的と種類について概説し、その中のエアロビックダンスを紹介する。また、脳性麻痺の科学的トレーニングの可能性として陸上競技者の短距離走に着目し、100 m 走での運動能力の差による相違を筋断面積と筋力、動作速度、ミドルパワーについて運動能力別に比較検討する。さらに、日本でトップレベルの選手 1 名を追跡調査し、短距離走に必要な能力について検討を試みた。